

椋木 弘（とちぎ・ひろし）

1、プロフィール

生涯にわたり、現代美術の旗手として国内外で高い評価を受けた村上善男は、詩人椋木弘として生地盛岡と 20 数年を過ごした津軽の民俗と風土に根差し独自の詩法を確立した。

<生没>

1933(昭和8)年3月14日～2006(平成18)年5月14日

<代表作>

「痛風譚」「海豚」(『澱循環』)「羅宇景」「とほほ景」(塩景)他

<青森との関わり>

現藤崎町出身の父に盛岡に生まれ。晩年の 20 数年間を独立した美術家弘前大学教授として弘前市に在住。

2、作家解説

椋木弘(本名・村上善男)は1933(昭和8)年3月14日、父千代吉、母節子の長男として岩手県盛岡市に生まれる。村上家は代々染色業「越後屋」を営む。

父千代吉は富木館村(現藤崎町)久井名館の出身。村上家へは婿養子として入ったが椋木が6歳のとき母節子が病死、ほどなく父千代吉が再婚のため椋木と弟を残し家を出、以後祖父母に養育される。この幼児体験がのちの創作に大きな影響を与える。

1953 年第 38 回二科展に入選。岡本太郎の知遇を得たことから本格的に画家としての歩みを始め、60 年代に入り発表した注射針をキャンバスに散りばめたアッサンブラージュが画壇に認められ、以後生涯にわたって現代美術の旗手として活躍する。

一方、画業と並行して行ってきた詩作は、1982 年に弘前大学美術科教授として弘前市赴任してきた頃より「早稲田文学」「詩学」「妖」「火山弾」「ぽえとりくす」

などに精力的に発表。1984年に発表した第1歌集『澱循環』を皮切りに、生涯に『林檎蜂起』『棘』『鱈景』『塩景』の5冊の詩集を上梓した。

椽木の詩は、生まれ育った盛岡を原風景としつつ自らの美術作品、とりわけ弘前在住直後から開始した「釘打ち圖」シリーズと呼応させた津軽の民俗・風土に根差した作品も少なくない。また「ツツツトテテテテトト」といった独創的な擬音を用いたり病気や事故に基づく実体験をユーモアを交えつつもストイックなダンディズムから「詩に陰影を持たせることにてれ」（荒川洋治評）を表出させた独自の詩法を確立。また独特な字下げや改行による視覚的表現も多く、藤富保男らの視覚詩とも接触し、2001年にパリで行われた「ヴィジュアル・ポエジィ」展に出品するなど積極的に活動したが、2006年5月4日に盛岡の自宅でその生涯を閉じた。享年73歳。

3、資料紹介

○「北奥氣圏」第3号特集「ことばと美術」—椽木弘・村上善男

雑誌（総合文芸誌）・79頁

2007（平成19）年5月4日

210mm×210mm

詩人椽木弘と美術家村上善男（同一人物）の没後一周忌に合わせ弘前市の書肆・北奥舎から発行された特集号で、詩人船越素子による最初の椽木弘論「欲望のかたち—『塩景』を読む」とロシア文学者・詩人工藤正廣のエッセー「椽の花、幻想—村上善男紀行」ほか掲載されている。